

木下杢太郎とその兄弟

— 太田圓三に就て —

野 田 宇 太 郎

木下杢太郎は大正十五年（一九二六年）十月に愛知医大教授から東北帝大医学部教授に転じて、遠山郁三教授の後をうけて皮膚梅毒学講座を担当した。愛知医大教授に就任したのはフランス留学から帰朝して一ヶ月目の大正十三年十月からで、丁度まる二年間とどまつてゐたわけである。この大正

十四、五年頃の木下杢太郎の文学や科学やその他の学問研究に對する視野は、留学と云ふ機会を塚としてよくよび拡がり、戯曲の筆は休めたが、詩、小説、評論などの文学者としての著述の他に科学や医学、美術の研究や、吉利支丹史にも筆を染めた。殊にその隨筆や評論にあらはれた文明批評家としての活躍は、極めて注目すべきものがあつた。たまたま大正十五年五・六月合併号の「明星」（再刊）をみると、與謝野晶子はその巻頭に「木下杢太郎さんの顔」といふ詩を発表し、

「雑俎」欄の「泥土自像」の中でも杢太郎について次のやうに述べてゐる。

○ 何事にも人並以上の優れた才能を持つて居ると云ふ人は少い。その上に更に幾つかの特に傑出した才能を持つてゐると云ふ人は極めて稀有である。専門家として優れた人は、大抵一部の云（事）にのみ精通してゐて、他の事には不得意であると云ふ人が多い。と云つて、その稀有な人が男子の中には挫折にあるのを見受ける。数学的、理学的、化学的、哲学的、芸術的、社会的、教育的、道德的の何れにも人並以上の才能と興味とを遍ねく持つて居て、特に其中の幾つかが専門的に優れてゐる所の、謂ゆる万能の天分を兼備した事が男子の中に挫折ある。私の親しくしてゐる人達の中でも、木下杢太郎さんの如きが其稀有な人の好い例である。木下さんは一方に科学者である、医学博士である、大学教授である。病院で皮膚科の専門医である。一方に画家である、戯

曲家、詩人、小説家である。また一方で考証家、批評家、支那學者である。また一方に独、仏、英、支那の各国語に通じてゐる人である。

○ 木下さんのやうな、大きな、さうして精緻に充実した規模の人は其中の一能だけを以ても儼に一家を成すことが出来る。該博な人には淺薄の非難の伴ふものであるけれども、木下さんには其れが無い。何事にも真面目であり、入念であり、研究心が深く、情熱が行き亘るのである。氏の知識も趣味も殆ど際涯がない程に広い。東西の陶器の話、料理の話、天文の話、版画の話、支那の芝居の話、何にでも一応の専門家的研究がしてあり、精細な意見が伴つてゐる。木下さんに対する人は十日でも一箇月でも其話題の尽きる事が無い。政治経済の方面に就てさへ注意してゐられる。

○ 私は木下さんが新しく出版された「支那南北記」を読みながら相変らず木下さんの讚美を繰返すのである。さうして私の思ふ事は女子にどうして木下さん型の人が昔から見当らないかと云ふ事である。

この文章は木下奈太郎が詩人として出発した学生時代から親しくその行方を見守つて来た與謝野晶子の、好意的な礼讃には違ひないが、だからと云つて過褒してゐるのではない。晶子が晶子らしく正直に感動をのべてゐることは、さきの「木下奈太郎さんの顔」といふ詩をみても判る。「支那南北記」をその年の一月に出版した四十一才の頃の奈太郎を、これ以上説明する必要もあるまい。

その同じ雑誌に奈太郎は「春のおち葉」と題して「序詩」

以下五篇の詩を発表してゐるが、その中に「永代橋工事」と「四月十七日夜」の二詩も含まれてゐる。

四月十七日夜

朝、亡兄の為めの追悼会の通知を受く。夜、書を読みながら、思、旧所に滞る。

○ 苛まれた心があたりを見廻はす。

何か外に其原因はないか、

何か報ゆべき仇はないかと。

仇があつて復讐が出来れば、

それはたとひ破壊であらうとも、

心はその為めにうちなごむであらうのに。

外に仇はなく、手の挙げばもない。

苛まれた心がただ身を責む。

春灯風冷く、

滂沱たり、ただ涙。

跋

花のかげ酒に涙の味あぢはひす。

（註・後の木下奈太郎詩集では最後の句の「花のかげ」が「花の軒」と改められてゐる）

亡兄といふのは太田圓三で、その年三月二十一日に四十五才で突如自殺、同月二十三日に告別式が行はれてゐる。この

詩は四月二十三日の夕、上野精養軒で行はれることになつた追悼会の案内状を受取つた夜に創られたものであつた。また「永代橋工事」と云ふ詩には雑誌発表の折にはなかつたが、後の「木下李太郎詩集」に収めた時には詩の終りに「永代の新橋は亡兄の心血を濺ぎ設計せるものにてありけるなり。」と小活字で追記されてゐる。「永代橋工事」も亦亡兄を偲ぶことによつて生れた作品であつたからである。

木下李太郎の本名は太田正雄である。正雄は七人姉弟の末子で、長女よし、次女きん、三女たけ、四女くに、その下が長男賢治郎、次男圓三で正雄は三男であつた。賢治郎は明治十年、圓三は十四年、正雄は十八年に生れた四つ違ひの兄弟である。実家は伊豆伊東の旧家「米惣」といふ呉服雜貨商で、父は惣五郎、母はいと、惣五郎のあとには長女よしが養子惣兵衛を迎へて嗣ぎ、そのあとを長男賢治郎が嗣いだ。長男は長じて家業にいそしむと共に地方政治に携つたが、次男は理工の学問を志し、三男正雄は医学關係の学問をすることになつた。

木下李太郎は伊東で小学教育をうけると東京に出て独逸協會中学から一高、帝大へと進んで医学を専攻したが、その間次兄圓三と生活したことが多かつた。その圓三が後に突如として自殺した時「何か報ゆべき仇はないか」「仇があつて復讐が出来れば」「それはたとひ破壊であらうとも」「心はその為めにうちなごむであらうのに」とまで自らの心を背んだのは、単に肉身としての当然の感情といふばかりではなかつた

やうである。李太郎は中学時代には文学を愛した以上に絵画を愛した。その絵心は中学卒業の時美術学校への進学に執着せしめたが、あくまでも医者になると云ふ家人の方針は動かず、一高医科に進んだ。然し一高在学中も美術と文学への執着は崩れなかつた。せめて大学では専攻語学の独逸語を生かして独逸文学科に進まうとした。然し又これも許されず、そのまま医学部に入學した。この大学医学部への進学の時、李太郎の心をひるがへらせて医学研究も亦人生の大なる利であることを説いたのは次兄圓三であつた。李太郎は高校時代に独逸語によつてゲエテを読んだ。岩元禎がその教授であつた。高校時代に文学への転科を思ひ立つた時、それを留めたのも岩元教授であつたと云ふ。圓三はその時ゲエテのこゝを持ち出して、ゲエテの生涯にとつて医学がどんなに役立つたかを説いたので、李太郎も亦その氣になつたらしいとは、長兄賢治郎の談である。いよいよ医学専攻ときめて帝大に入學してからの李太郎は、一方に明治四十年から與謝野寛、晶子の新詩社に加り、「明星」に作品を発表しはじめると共に、又一方には美術雑誌「方寸」の寄稿家としても活躍しはじめてゐた。将来医学者を志す李太郎にとつて、世間一般からみれば所謂趣味的なものにすぎないやうな文学や美術が、実際にははじめから趣味の域を越えてゐて、その青春の大部分を燃やしはじめたといふことは、さうした李太郎の精神と才能を内面からあほり立てた何かがあつたからに違ひない。その「何

か」を求めようとする時先づ第一の手がかりとなるのは、四つ年上の兄圓三である。李太郎は大学生の時「パンの会」の文学運動を興した、その当事者であつたが、その「パンの会」の性格としてあらはれた江戸趣味(勿論これはヨーロッパ人の眼と心を透して戻つて来た一種のエキゾティシズムとしての江戸趣味だが)は、どこから来たか。その問題一つを考へても、思ひ浮んで来るのはやはり李太郎が、その肉身のうちで最も信頼してゐたと思はれる兄圓三である。

圓三は伊豆の小学校から長兄賢治郎と同じ静岡中学校に學んだ。その中学校では創立の關係でこの兄弟は二級違ひとなつた。圓三は同校四年の時、將來のためもあつて、東京築地の府立尋常中学校(後の府立一中)に転じ、一高帝大のコースをとつた。大学卒業後は鉄道省に入つて技術面の重要な存在となつたが、大正十二年九月一日の関東大震災直後、帝都復興院が組織されるに當つて、その総裁となつた後藤新平に招聘されて鉄道省を去り、復興院に入つた。この復興院はやがて内務省の外局として復興局になつたが、太田圓三はその時土木部長の要職に就いた。その結果が大正十五年三月二十一日夕刻の、突如とした自殺であつた。この悲報は愛知医大教授として名古屋に在つた木下李太郎の許にもたらされた。太田圓三を知る人々は青天の霹靂のやうに驚いたらしいが、わけても李太郎の驚きと悲しみは深く、わが事のやうに身もたえて、「春灯風冷く」「滂沱たり、ただ涙」であつた。

三月二十三日に告別式がしめやかに行はれた。それから一ヶ月後の四月二十三日には多くの知友の發起で、上野精養軒で盛大な追悼会が催され、四百三十余名の來会者があつた。その追悼会当日の記録は太田家の紋所に因んで「鷹の羽風」と題されて今日に遺つてゐる。このパンフレットを中心に、長兄賢治郎の談などを交へて太田圓三の在りし日の姿の素描を拾つてみよう。

静岡中学から東京築地の尋中に転校した圓三はしばらく伊東出身者の家に下宿したが、間もなく姉だけの嫁す本郷西片町の義兄斎藤十一郎の家に預けられて、そこから約一里余の道を歩いて通學した。当時の學友であつた加藤静夫氏の追悼辞「太田君の年少時代を偲びて」によると、「洒脱な性格が同級生並に多くの他級生の敬愛の的」となり、又、猷身的義侠心も強かつたさうである。「太田君の凝り性は皆さん御存知の通りであります。囲碁、将棋、歌留多、野球、玉撞き、謡曲、長唄等、総べて苟くも指を染めた以上、決して中途半端では止めませんでした。死に至るまで熱愛して止まなかつた文学の趣味は、明治二十三年頃『少年文学』の『こがね丸』や『二人李助』の時代から初まつたさうでございます。中学五年生の頃には既にテニソン、ウアーヅウアース等の詩集に読耽り、散文ではホーソーンやラフカヂオ・ハーンの著書を各二三冊づゝ読破して居ました。当時流行の新体詩も決して太田君の感興を惹かずには居りませんでした。罫紙五六

枚以上にも亘る太田君自作の長篇七五調で漢語の可なり多く這入つた晚翠ばりの深刻な新体詩が屢々私の許へ郵送された。(中略)『ウェルテルの悲しみ』や近松の心中物を愛読したのも中学卒業の年頃であつたと存じます。是等が太田君の最期と幾分の關係を持つて居ることは否まれ難いかと想像致されます。」と加藤氏が述べてゐる所などは、ことに李太郎は勿論のこと、太田家兄弟姉妹にも共通する多才の風格が偲ばれて逸し難いものがあると共に、私には兄圓三が弟李太郎に与へた影響といふ点で、何かはげしく思ひ当るものがある。その學問好きで情緒に敏感で、内部に堅い正義感といつたものを蔵してゐる性格は、そのまゝ李太郎の年少時代のことをきいてでもゐるやうな思ひがするからである。又加藤氏は次のやうにも述べてゐる。「……太田君は一見多數の矛盾を持つた人でありました。詩人の情熱と理學者の冷靜、これが一つの矛盾に見えます。政治家肌の大膽と技術家氣質の綿密、これも一寸両立し難い様に思はれます。其の他孤独の憧憬と賑かさの熱愛、負け嫌ひと自己犠牲、外見上の無愛想と徹底した親切。是れ等はいづれも一見甚しい撞著の如くに感ぜられますが、必ずしもさうではございません。(中略)或るものは先天的傾向と後天的努力との相剋し相闘つた反映とも見られます。また或るものは自覚した故意の躲避でもありましたらう。……」このように述べてから加藤氏は、震災の日に焼

け出された時、この年少時代からの友を思ふ太田圓三が加藤氏の家族の安否を氣違つて捜し歩き、遂に加藤氏をみつつけて焼けのこつた自宅に收容した実話を語り、「外見上の無愛想と徹底した親切」の実例を出してゐる。

私はこの年少時代の太田圓三について述べられた加藤氏の筆記を読みながら、しばしば、これは木下李太郎のことを語られてゐるのではないかと疑りたくさへなつた。余りにも相似た圓三正雄の性格である。医学と文学—科学と芸術の一見對立する両極を兼備しながら、ますます學問的又は芸術的視野を拓げていつた木下李太郎も「一見多數の矛盾を持つた人」だつたに違ひなかつたのである。

又、復興局長官であつた直木倫太郎氏は「技術家としての太田君」と題してその中に「太田君は……寔に天才的の閃きの多い、所謂理想味の勝つた技術家として第一流の方であつたのであります。芸術家の修養のある自ら情熱的な詩人肌の方であつたので、これを普通一般の技術家のタイプから申しますと、余程飛離れた特色を持つて居られ、即ち其処に創作的氣分の充實した技術家として、我國の技術界では頗る稀な尊ぶべきタイプの方であつたのであります」と述べてゐる。これも亦木下李太郎の或一面とあまりにも似た性格ではなからうか。李太郎は醫學者として皮膚科醫學の專攻であつたが今日も尚世界醫學界に採用されてゐるといふフランスのランゲロン博士との協力になる糸状菌の「太田・ランゲロン」分類法を發明するまでの研究経路には、やはり他の醫學者では

考へ及ばないやうな創作的な独得の方法を用ゐた。渡欧に當つてアメリカからキユーバにゆき、植物の研究をしたこともその一つであつたらう。その他晩年の戦争の中で描いてゐた雜草図譜が、植物学者では遂に及ばない色彩と表現の力を持ち、美術家ではこれ又及び難い細微な觀察力と正確さを持つてゐることからでも、このことを証明することが出来る。

このやうに独得なすぐれた技術者であり、責任感も正義心も強かつた太田圓三は、種田虎雄氏の「太田君と交りて」によれば、感激性が強く、「此の感激性の為に、時には常軌を逸」することさへあつたと云ふ。その持論として種田氏が太田圓三より常にきいてゐたのは、「社会に多数の技術者ありと雖も、仕事を為すことを自己榮達の手段として居る者が多く、自分は仕事を以て生命とする。」といふことであつた。

木下李太郎も亦時折は感激性のためにハメを外したこともあつたといふことは私も聞いたし、小さい部分では私自らそれを感じたこともある。また仕事を目的とするといふことで私は木下李太郎の或日のことを思ひ出す。それは既に戦火が東京の大部分を灰燼とした頃のこと、李太郎最晩年の一日だつた。太田正雄教授としての皮膚医学業績をまとめた書物が、刊行を前にその発行書店と共に焼けたと伝えられた（その紙型はのこつてゐた）時だつた。私は大変気の毒な気持ちで、お見舞を云ひたかつたが、太田博士は「自分の業績をまとめた本が焼けたからと云つて少しも医学界の損失ではない。

医学に限らず科学は日毎に進歩してゐるし、自分の仕事は次の若い連中の基礎になつて、既に今日ではその上に新しい研究がなされてゐるのだから……。それよりも、日本の古典だけは焼きたくないね」といふ意味のことを云はれた。書物として何を最も大切に戦火から護るべきか、と云ふことを話しあつたのもこの時だつた。この精神はやはり太田圓三と共通する、といふよりも太田圓三といふすぐれた兄を持つて、壮時に多くの影響をうけた李太郎の一面ではなかつたかとさへ私には感じられる。

鉄道省に入つた圓三は、着実に情熱的に技術者として才能を発揮し、鉄道省建設局工事課長となつてゐた。そこに大震災が来て、帝都復興院が出来、後藤新平が総裁となると、この大事業の完遂のためにあらゆる人材を各方面から求めた。その時太田圓三は復興院に招聘されることになつた。このことについて後藤新平は追悼会の挨拶の中で「帝都復興の為に缺くべからざる有力な人々を招集する際に於て、太田君の才幹を認めて招聘し、君も亦之を快諾することになつたのであります。其の工学士たるばかりではない、文学の才もあつて計画に富み、さうして余り情実になづまぬ所に於て、私の敬慕する所からぬ所から、同君を採用することに致したのであります」と述べてゐる。この帝都復興院が復興局となつたのは前述の通りだが、太田圓三は土木部長と云ふ東京復興の技術的な重要面を握る立場に置かれることとなつた。そ

して間もなく興つたのがこの復興事業をめぐる疑獄事件で、当事者の努力にもかゝらず、復興は遅々として進まなかつた。責任の立場にあつて、仕事が進まないことだけでも十分神経を消耗してゐた太田圓三は、その上疑獄事件まで重なつて、身に覚えのない噂さへ耳にするやうになつた。潔白な性情の持主であつただけに神経衰弱が嵩じていつたのは当然であらう。「復興局の仕事が思ふ儘に進まぬ爲に、非常に憤慨して居られたこともありましたが、是が爲に唯憤慨するばかりでなく、自ら神経衰弱に陥るも厭はぬ位に、昼夜此の事に熱誠に尽瘁せられたと云ふことは、友人としての諸君が皆御承知になつてゐることゝ私は思ふ。或時、太田君が私を訪はれて論ぜられた事柄は、一々肯綮に當つて居つた。若夫君の清廉潔白にして、尋常時流を抜いて居られたことに至つては私の弁を以て此処で彼は申すことは却て同君を潰す所以であつて云々……」とは後藤新平の談である。

さういふ苦境にあつても太田圓三には外見的には少しも變つた特別の容子はみれらなかつたと云ふ。死の前日は役所から鉄道協会に行つて球を撞き、夜は好きな長唄の稽古にいつた。太田圓三は長唄に一家をなす程の腕前で、四月の大会で歌ふ唄をさらへたりした。その翌日が運命の三月二十一日である。然しそれより前に太田圓三の身を案ずる知友は頻りに休養をすゝめてゐたが、彼は遂にそれをきき届けなかつたのである。神経衰弱が嵩じてゐたことは、死の数日前に役所で

夢で自殺した時の気持のよかつたことを話してゐることからも察せられる。それは刀をうしろから自分の首に当ててすり切つた、その首がころりと前に落ちた時は何とも云へない快感だつた、と云ふのである。

三月二十一日は日曜で、日頃の不眠がつり朝から床にふせてゐた。ただそれだけで別段愛つたこともないので、夫人は子供を連れて、主人と女中だけをのこして子供の小学校入学のための鞆を買ひに三越まで出かけた。圓三の寢室の片すみにはズボンが何時ものやうにかけられてゐた。そのズボンのかくしの中には日頃愛用してゐたドイツ製のナイフをいれてゐた。「臥床のまゝ君の冥想は果てしなく続いた。想像は想像を生んで遂に君を死の断崖へと導いた。その時君は発作的に立つてズボンのかくしからナイフを取り出して再び床にはいつた。その小さなナイフで心臓部を一突き貫いて絶命したものと想はれる。」と、太田圓三の死を悲壯な復興事業の人柱として哀惜する友人の一人、倉橋藤治郎氏は追悼会の当日に出席者に配布した小冊子に書いてゐる。

「鷹の羽風」といふ追悼録の中にある鶴見祐輔氏の「太田君の性格」を最後にもう少し紹介してみよう。太田圓三がすぐれた工学者であり技術者であると共に、一面に文才に秀でた人であつたことは、前にもしばしば引用したが、鶴見氏も亦それを述べてゐる。或時鶴見氏に太田圓三は、自分は鉄道に居つた時に非常に沢山小説を読んだ、そして自分が始終死

ぬ迄に為たいと思つて居ることは、どうか世界の思想史を書きたい、人類の思想の変遷して来た歴史を書きたいといふことで、自分は子供の時から日本の文学を読んで居つたが、此の頃は外国の物を非常に沢山読んでゐると、泌々と語つたさうである。太田圓三の愛読書の中には内外の文学書が多く、

その種類も日本文学、支那文学、ヨーロッパ、アメリカの文学、ことにヨーロッパでは独、露、伊、佛、愛などの各国の文学があつたと鶴見氏は述べてゐる。「私は太田君が二人の人があの中に棲んで居つた、一人は実に理性の念に勝つた技術家（中略）いま一人は御令弟にあのやうな文学者（註・木下李太郎）がおありになるその同じ血潮を享けて居られた、実に思想的文学的な方面を多量に有つた太田君であります」また鶴見氏は死の前日に太田圓三が丹念に書いた創作の長唄歌詞「物はみな、はなれやすきが常ぞかし。あれあの木々にいまをさかりとさく花も、夜半のあらしにちるならひ、翠帳紅けいまくらならぶるこひなかも……」といふのを引用して「さう云ふ文学的情緒が、あの方の心の中に力強く流れて居つたと云ふことを泌々感じたのであります」とも述べてゐる。以上でその追悼会が如何に盛大を極め、如何に多くの人々から哀惜されたかが判るが、その人は神経衰弱の末に突如として自殺した人であり、決して英雄的死に方をしたと云ふものでもない。また帝都復興事業の土木部長と云ふ要職に在つたとは云へ、決して大臣大将の死でもない。単なる自殺者の死

と云つた方が適切な感じである。それにも拘らず、工学界の代表の人々を中心に、当時の選りすぐつた文化人四百三十余名が一堂に集つて会のはてるのを忘れたと云ふことは、たゞごとではない。結論すれば太田圓三が単なる技術者ではなかつたといふ一事につきるであらう。

先日私は偶然の機会に太田圓三のもとでやはり技術者でもあつた山崎匡輔氏から面白い話をきいた。それは太田圓三が「人間の二度とない生涯を、ただ一つだけの仕事で終るといふのは哀れな気持である。折角の一生だからやれるだけのことはやつてみたいが、さういふ点で最も理想に近いのは文芸家である。自分も実は文芸家になりたかつたのだ」と云ふ意味のことを語つたと云ふのであつた。私はこの話をきいて内心思はずはつとした。これまた余りにも弟の木下李太郎の思想と同型だからであつた。

木下李太郎は最初からの家族の目的通り医学者になつた。いや医学者にされたのであつた。父の惣五郎は李太郎四才、圓三三才、賢治郎十二才の時東京で歿してゐて、長女よしと夫惣兵衛が親代りであつた。李太郎を遮二無二医学者にしたのは此人達であつた。はじめに画家を志望し、次にドイツ文学専攻を希望し、どれも学習の目的としては許されなかつた。やうやくあきらめて医学生になり、大学を卒業して土肥教室の助手となつてからも、日本を脱出してドイツのある美術館に入らうとしたことさへあつた。それほどまでに唐にあはぬ

「医学者となり、而もその医学者としても大成したのは、ゲエテの生涯を理想とし、やがてフランスに留學してそのユマニスムの真髓にふれて人生觀を確立したからだと云つてよい。然しこの木下奎太郎の生涯の在り方は、実は次兄圓三の理想とする生涯の在り方でもあつたのである。年少時代の奎太郎は、このすぐれた兄圓三の感化によつて成長し、圓三は自らが果し得なかつた理想的人生の一面を弟に果たさせようとしたのだと断定しても、大過ないと思はれる。すくなくとも、弟の太田正雄が家族の眼を恐れて自分の発表作に木下奎太郎のペンネームを用いはじめた当初、それを医学修業が怠慢にならぬ程度にあたたかく見護り私かに激励したのは太田圓三であつたに違ひない。長兄賢治郎の談によれば、正雄と圓三は同じ家に住みながら、その性格から滑稽なほどどちらもあり口を利かなかつたと云ふことである。その二人の弟を常にあたゝかく見護り、或時は親の立場で世話をした長兄の眼には、これがほゝえましくもみえたらしい。無駄口を利かぬのは年少時代の奎太郎（正雄）の性格で、決していがみ合ひの結果ではない。前にも述べたやうに、加藤静夫氏によれば圓三も亦「外見上の無愛想と徹底した親切」が同居した性格で、二人は何れも無口だが、内面にはそれと正反對のあたゝかい信頼感がお互ひの間にあつたのである。

太田圓三は死に際して何らの遺言もしなかつた。然し、常に口ぐせのやうに云つてゐたのは「隅田川の工事だけは完成

して死にたい」といふことで、それがいはば遺言であり遺志であつた。太田圓三が帝都復興の土木事業の中で、最も情熱的でその創作的意慾を打ちこんでゐたのは隅田川の橋梁であつた。隅田川はバリのセーヌ河、ロンドンのテムズ河、またはフィレンツェのアルノ河にも匹敵する名河の一つである。この川あつて大江戸が生れ東京が生れてゐる。都市河川として最も古い歴史と伝統をもつ隅田川を、東京と共に永遠のものとするために、その橋梁には單なる技術者の思考だけでは及び難い、民族的な考慮が必要であつた。いはば太田圓三が死を堵した東京建設のよるこびの中心は、この隅田川の橋梁と、その他の支流又は江戸城外濠の橋梁などがあつた。そのために彼は進んで文学者や美術家に協力を求めたが、このやうなことも彼にしてはじめてなし得たことである。その結果一つだけ実現したのは、東京駅八重洲口の外濠に架つた八重洲橋であつた。これは大正十四年に工事に着手されたが、その設計者はこの兄の呼びかけに文学者の一人として応じた木下奎太郎であつた。

しかし太田圓三は隅田川の新橋梁が実現しない前に死をえらんだ。その死を悼み、太田圓三の偉大な功績をたゞへて、知友によつて永代橋に近い相生橋の中ノ島公園に建てられたのが「太田圓三君之像」であつた。―これも今はなくなり、新しく神田橋際に再建が進められてゐると云ふ。

隅田川を千住から河口まで迎ると、千住大橋、白鬚橋、言

間橋、吾妻橋、駒形橋、厩橋、蔵前橋、両国橋、新大橋、清洲橋、永代橋、相生橋、関橋が次々にあらはれる。この十三橋のうち、新大橋だけは明治末年の架橋で、他はすべて復興計画によつて生れたものである。その橋の形は夫々に違つてゐて、何れも形態的には勿論だが、橋梁学的にもすぐれたものなさうである。今後に於ける東京の都会は、この橋々の美を中心にして、夫々の下町の個性と伝統を生かしながら建設されてゆかねばならなかつた。しかしそれは戦災で一応希望を断られたが、今日この橋々の形態美を綜合してみると、それは偉大なる創作であり、東京の隅田川といふ大きな素材の上に創作された近代芸術であることを感ずる。その作者が太田圓三である。

この太田圓三の人間像に思ひをつなぐ時、圓三を見とした木下李太郎の偉大な生涯の一端の謎が自ら解けてゆく思ひがある。「四月十七日夜」の詩に激情を危くおさへた学殖詩人李太郎の心はつきりと感じられるのである。

以上で一応この稿は終る。原稿締切日に追はれて走り書きになつてしまひ、杜撰の譏りをまぬがれ難いが、木下李太郎の血縁、ことにその四姉二兄について調査するに当り、先づ私は次兄圓三にふれることになつて、今はその調査のなかばに過ぎない。又斎藤家に入った三姉だけ女には一度太田家で面接の機を得、並々ならぬその趣味性について一驚したことがあつた。このだけ女は明治女学校の出身で植村正久のもとで早くも基督教の洗礼をうけ、在学中には中島歌子の塾にも通ひ、樋口一葉と同門であつた。だけ

女と一葉には交友があり、この文才あり進歩性のある姉の感化はまた幼年期の李太郎のエキゾテインズム醸成に役立つこと多大であつた。後日筆を改めて太田圓三と共に論じようと思つてゐる。
(本学講師)

幻住庵記の異文の一つ (第三号所収) 追補

前号に紹介した、幻住庵記の異文の收められている『芭蕉文考』なる写本について、同書が著者乃至は所蔵者の署名を欠いているために、表紙・見返しにある蔵書印等にある「杉家蔵印」等の杉の字によつて、杉氏某なる人物という推定を下したが、その後判明したことを追加しておきたい。杉家というのは杉氏ではなく杉山氏のことであるらしく、本文中に出て来る梅人の名からすると杉山杉風の末裔であるうと思われる。また右のような蔵印は杉山家の旧蔵本にしばしば見受けられる由であつて、かたがた杉家(さんけ)の誰かによつて書かれたものであると考えてよいかと思ふ。さしあつては梅人が著者として擬せられるが、それはともかく所収の幻住庵記の信憑性もいつそう強められるわけである。

このことは荻野清先生から御教示いただいた。写本の伝来がたしかとなつたことを喜ぶとともに御教示下さつた先生に深謝したい。(板坂)